

東日本大震災から 10 年

－理念（イデー）の中心として－

大江 勝秋

仙台在住の作家、佐伯一麦氏が「こんな大災害を作品化するには 10 年はかかる。」と述べていたが、この間もその壮絶な体験は語り継がれて来ました。震災の翌年 2012 年 2 月 18 日、私が属している NPO シニアネット仙台の「賢治教室」（代表 大内秀明）が仙台文学館で、『宮沢賢治からのメッセージ』と題してイベントを開催。花巻市のイーハトーブセンターの後押しがあって盛況でした。そこで大内先生は賢治精神から学ぶ「新しい文明」のあり方を希求したのでした。そして、2013 年 3 月に、復興共同センター内（上杉通・北辰ビル）に事務所を構え、“仙台・羅須地人協会”は出帆しました。この年 2013 年 10 月 14 日、「仙台・羅須地人協会設立記念会」と銘打って半田正樹先生の司会で行われ、200 名近い参加者で会場は賑わいました。外は玲瓏な秋空で、受付係をしていた私は、「理念（イデー）の中心」はここからと確信しました。

翌年 2014 年から半田、田中両先生の許で、フリースクールが開校されて、今日まで 6 年間継続中です。このゼミナールには、マルクス、W・モリス、ルソー始め多彩な先人が取り上げられました。

この地道な活動を、河北新報・共同通信などのメディアが紹介し、世上に拡がったのを覚えています。

それに加えて、当協会では年一度、イベントを開催し、色んなテーマを世に発信しています。（現在、コロナ禍で休止中）

その中で、特に印象に残っているのは 2017 年、名取市文化会館で行われた『賢治・秀松農民芸術祭』。当日の 1 月 21 日は大雪の予報が外れ、320 名をこえる入場者が詰めかけました。事前に河北新報や FM などに取り上げられたことや、名取市市長始め行政、郷土史家の地元住民、農業高校の生徒さんらが我々を支えて参加し、まさにチーム一丸でした。

そして、震災後 6 年経って、名取市（特に閑上地区）は復興半ばで混乱している最中でした。地元、初代名取市長の高橋秀松が、宮沢賢治と無二の親友であったことを来場者が知って、誇りと励みになりました。宮農高和太鼓部の「復興太鼓」の演奏も花を添えました。

招待席には、先立たれた大内芳子さんが、ご主人の大内先生の勇姿を、目を細めて聴き入っていたのが思い出されます。

この準備に仲間と数ヶ月奔走した私の心中に自ずと拙い句が生まれました。

「耀（かがよ）フ午後 春光一闪 寒風ヲ斬ル。」

私の震災 10 年は羅須 10 年とパラレルに重なり、失われた言葉は回復されつつあります。

（『セダードつうしん』第 3 号）